

老荘思想に学ぶ (1) 力のメカニズム

～講義録～

●「自国ファースト」の風潮を 100 年単位で考える

本日は、老荘思想についてお話ししたいと思います。まず今、なぜ老荘思想をお話するのかということから始めていきたいと思っています。

最近、ご承知の通り、ドナルド・トランプさんという人が大統領になるということが、現実のものとなりました。そこでせきを切ったように、非常に「自国ファースト」といいたましようか、そういうことを言う人たちがたくさん出てきました。政治とは、大体そういうものなのですが、それにしても保護主義といった閉鎖的な政治家がトップリーダーになってくるといことがとても多いわけですね。

そういう風潮が、今後どのように変わっていくのかということを考えるときに、100 年とか 150 年の単位で考えていくのがちょうど良いと思うのです。ご承知のように、今年が易経の干支から言いますと、「丁酉（ていゆう）」という年です。この 60 年前、またその 60 年、60 年と数えて 180 年前は、なんと大塩平八郎の乱の年です。歴史家がこぞって言うところによれば、やはり明治維新はこの大塩の乱からスタートしたといわれています。したがって、転換とは 30 年間かかるというのが大方の見方です。

●近代西洋思想、拡大主義のリードを経て自国見直しへ

ちょうど今年はそのような転換の年になっているのです。そのように考えてみると、この明治維新、つまり近代化とは、どう考えても西洋近代思想のリードによるものです。非常に近代的な技術による軍事力を誇った西洋列強がわれわれの国に襲ってきて、そのことに後押しされて、この日本も近代国家の方へぐっと進んだわけです。また、戦後の日本を考えてみても、状況からいって西洋型の象徴であるアメリカに、全てリードされるかのようにしていった。つまり西洋近代思想というもののリードによってこの 150 年間、われわれはやってきたわけです。

そのアメリカが現在どうなっているかといえば、一時は「世界の警察国家」というぐら

田口佳史

いに、全世界の平和を司るような象徴であったものが、どうもこのところそうではないような状態になってきました。つまり警察力の低下とでもいえる状態になってきたのです。やはり、自国をもって、世界を押さえていくという、ある種、拡大主義の限界が出てきたわけです。

そうさせてはならじという勢力が出てくる一方で、もう一回自国を見直して、自国の力をもっと発揮したり蓄積することが重要なのではないかということです。

戦後のアメリカを見ていれば、わが国に対する影響も、強弁すれば、軍事力やライフスタイル、そしてアメリカンキャピタリズムに代表されるような資本主義、あるいは経営学。そういうものでアメリカ化が成されてきました。その一つの反動として、今の国内主義になっているのではないかと、私にはどうも思えてならないわけですね。

●老子が説く力のメカニズム－まず反対に動く

今日お話しする老荘思想の中にも、こういう言葉があります。それは「之を弱めんと將欲せば、必ず固（しば）らく之を強くす」というものです。「この世の中の自然の哲理によれば、何かを弱くさせようとするなら、必ずまず強くして、それから弱めていくのだ」という意味です。それから「之を廃せん」、もうこれを廃止する、あるいは、なくそうと「將欲せば、必ず固らく之を興す」ということです。反対の現象というものがどうしても起こってくるのです。これは後でも出てくる「陰陽」の一つの成せる技であります。

もっとやさしくお話をすれば、もの、例えばボールを前に投げようというときにどうされますか。最初から前に向かって投げる人はいませんね。つまり簡単に言うと、ぐっと後ろに引きますよね。反対に行くわけです。この世の中の力のメカニズムとは、「こうしよう」と思う、その反対がまずあって、それから目指すところへ行くというのが、老子の説いている力のメカニズムなのです。

●この先に見出す人類の指針－老荘思想

現在、そういう状況で、世界中がこぞって自国ファーストになっているのも、ある種そういう力のメカニズムが動いていると思うのです。いよいよここからしばらくは、そういう風潮になっていくのでしょうが、それが数年して終わった暁に、西洋近代思想に代わっ

田口佳史

てくる、皆が待ち望んでいた人類の指針のようなものが出てくるように思えてならないのです。その時に非常に参考にした方が良い、あるいは非常に強い影響力を持つであろうと思えるものが、今日お話を申し上げる老荘思想なのです。

老荘思想に学ぶ (2) 水の精神

～講義録～

●現代に生きる老荘思想－しなやかな復元力

最近、西洋社会の特にビジネススクールなどの人が来た時に、話を交わして、彼らが象徴的に主張する一つの言葉があります。それを挙げてみると、大体こういうことになるのです。

まず「レジリエンス」という言葉です。“Resilience over Strength”（レジリエンス・オーバー・ストレングス）。ストレングスとは、「力」ですから、「もう力の時代は去った。やはりこれからはレジリエンスだ」と言っているわけですね。

このレジリエンスとは一体何なのかというと、あえて言えば、老荘思想の考え方では「復元力」に当たるものです。後で「柔弱は剛強に勝る」という言葉を解説しますが、「鉄板と柳とどちらが強いのか」というときに、老荘思想では「断然、それは柳の方が強い」ということを言っており、その復元力に当たります。

大震災や津波など、思ってもみなかったいろいろなことが起こるのが今日の世の中ですが、そのときに重要なのは、「その後、復元するかどうか」ということなのです。そういうしなやかさやしたたかさが非常に重要だということです。腕力や全ての力よりも、もっとしなやかな復元力の方が、生命力を感じるのです。ですから、そういう意味でこのレジリエンスとは、最近、経営の世界などでも非常に使われる言葉になっています。

●プッシュプッシュではなく、引いて全体を見直す

それからもう一つ彼らが多用するのが、この“Pull over Push”（プル・オーバー・プッシュ）ということです。要するに「プッシュの時代は終わった。もう、押して押して、がんがん押していくという時代ではない。やはりこれからは引く時代だ」と彼らは言うのです。これも老荘思想の考え方で、先ほどから言っているように、何かをしようと思ったら、その目的の反対をまずやって、それで空気を読むというようなことが、非常に重要だと言っているのです。

戦後すぐの高度成長期は、もうプッシュ一点張りでどんどん押したわけですが、2000年代に入ってからはむしろ、「よく見る」「よく考える」「よく観察する」などといったことが言われます。いわば、ぐーっと引いてみて全体を見回す、ということがとても重要だということです。生き方一つにも、押して押しまくれという時代ではないのではないか、ということを行っているのです。

●理屈より実行、そして自ら考え創発する

それから“Practice over Theory”（プラクティス・オーバー・セオリー）。理屈の時代はもう去って、やるかやらないか。実行するかどうか。そういう時代だということを彼らはよく言います。つまり「理屈は全部出そろっている。もう十分だ。さあ、実行だ」と。今はそういう時なのではないか、ということです。ところが、世界的に見ても、何か新しい考え方をどんどん形にしていくということが少ない。それは問題ではないか、ということです。現代人の気風の中に、まだプラクティスという実行や行動に対する情熱や熱意が足りないけれど、これからはそういうことが求められる時代ではないのか、ということを行っています。

もう1つよく挙がるのは、“Emergence over Authority”（エマージェンス・オーバー・オーソリティー）という言葉です。このエマージェンスとは「創発」、要するに「創造」ですね。自分たちが考えて考えて、考えた末、何かをやっていくということです。オーソリティー（権威者）に聞いて「ははあっ」と言って、それをやる時代ではもうないということ、彼らはすごく言うのです。

●老荘思想の基本－「水」の重視

いま挙げました4つの言葉に共通して流れているものが、実は老荘思想の基本なのです。それは何かというと、物事との対立の仕方が自分本位、自分勝手でないということです。相手をよく観察して、相手がどういう気持ちでいるのか、どういう特性があるのかなど、そういうものをよく見て、われわれはやっていく必要があると説いているのです。

その代表的な例を一つご紹介しておきたいと思います。老荘思想といえば、「水」を非常に重視します。一番有名な言葉で皆さんよくご存じなのが、「上善（じょうぜん）は水の若（ごと）し」という言葉です。実はこの有名な「上善水の若し」という言葉の次に

田口佳史

「水善く萬物を利して争はず」という言葉が付いています。私は今までこの歳まで生きてきて、これが非常に重要だと思うのです。

●水は触れ合うもの全てから吸収して豊かになる

中国古典のこのような言葉の非常に味わい深い点は、「どのように読んでも結構」という自由闊達なところがあることです。あまりひどく自分勝手に読んではいけません、この「水善く萬物を利して争はず」も、私は若い頃にこれを読んだのと、現在の心境になって読んでいるのでは、ずいぶん意味が変わってきたと思うのです。

どのように変わってきたかという、この「水善く萬物を利して」ですが、水は今では皆「何とかウォーター」といって買って飲んでいますよね。なぜかと言えば、それは栄養分が非常に豊富にあるからです。では、何か栄養を後で足しているのかというと、そうではない。水が流れる過程で、岩や、そこに生えている水草などから吸収して、それで水自体が栄養分に富んだ存在になっている。それが「萬物利して争はず」ということなのです。「争ふ」とは対立すること、あるいは対決してしまうことです、吸収できないのです。この言葉はそういうことを言っています。

私の今の心境から言えば、「触れ合う人、皆、我が師」という言葉がありますが、どちらかという、それに近いです。どういう人であれ、触れ合う人からうんといろいろなものを吸収するという心を掛けておくと、正式に勉強をしなくても、ある程度、時間を活用することによって、知識が豊富になったり何か新しい発見があったりするということを、よく言うようになりました。

●全てを活用し、争わないという水の世界

もっと最近、感じていることがあります。「善く萬物を利して」とは、「いかに無駄なものがこの世の中にないか」、つまり「全てのものをよく活用し、よく用いる」という言葉ですが、この「善く～利して」ということは、結局いろいろな資源や素材があるし、また、もっと身近にはいろいろな人間がいるわけで、そういう人たちをうまく活用した人の勝ちなのです。そういう意味から言うと、「水善く萬物を利して」とは、とても重要なことなのです。

また、「扶桑喧嘩」という言葉がありますが、この「争はず」ということも重要です。

田口佳史

私も若い時は人と争うことも多かったと思いますが、一つとして良いことはないのです。もう徹底的に勝ったといっても、何か喜びがない。どうしてか。勝っても、相手に何か申し訳ないことをしたという気持ちがあるし、逆に相手に恨みを残しているのではないかも思ってしまう。ですから、まず老荘思想の金言として、この「水善く萬物を利して争はず」という水の本質があります。

●この世で一番強いのは水ーやり続けることで得るもの

ついでに、水の本質について一番私が言いたいことは、「この世で一番強い金あるいは石よりも、水は強い」ということです。水が金や石などよりも強いということを老荘思想は思想している。これは「雨垂れは石をも穿（うが）つ」ということです。ぽつん、ぽつんという雨垂れが、石という一番固いものにも穴を開けてしまう。それほどの非常な強さが水にはあるのです。ですから、この世の中で一番強いものは何ですかと聞いたら、それは水を挙げなければいけないのです。水の強さとは、つまり間断なくずっと長期間に渡って、一つの事をしている人の勝ちである、という本質なのです。自分が好きだからというのが一番良いと思うのですが、諦めずになんとなく一つの事をやり続けている人には、それなりの風格が出てきますし、発見も非常に多い。さらに言えば山登りと同じで、見える風景が全然違います。そういうこともあって、水の本質とはすごいことなのです。

●自分の形をなくして、まず相手の形を知る

もう一つ、非常によくあるのは「無有（むゆう）にして無間（むかん）に入る」ということです。良い言葉ですね。これは私が若い頃から、非常に参考にした人生訓です。「無有」とは何かというと、「自分の形を持たない」ということです。したがって、水は入れないところがない。相手が複雑極まりない造形であっても、入ることができる。どうしてか。「無有」だから、自分に形がないからです。つまり、自分に形があるうちは入れない。自分の形をまず殺して、全く自由気ままな、自由闊達な心持ちによって、自分の形をまずなくす。無形にする。そういうことによって初めて、どの人とも仲良く、その人の心の中にずっと入っていくことができる、ということを行っているのです。

そうやって考えると、俗に言う、「ものを売る」という仕事をしている方にしゅっちゅう申し上げるのが、この言葉です。「あなたは、セールスをするときどのような言葉から始めますか」と聞くと、大体の人が自己紹介あるいは自社の商品の紹介から始めるのです。これは、「自分の形はこうです。あなたはこの形に合わせなさい」と言っているとい

田口佳史

うことなのです。ですから、私がぜひお願いしたいと思い、こういうことから始めてくれ
と言っているのは、「何かお困りのことはありませんか」とか、「何か困っておられるこ
と、いま悩んでいることはありませんか」ということなのです。

相手が「ない」と言ったら「例えば、この間、こういう会社へ伺ったのですが、こうい
うことにお困りだということを知りました。御社ではどうですか」と聞く。つまり相手の
形を知ろう知ろうというところから入っていくことが、この「無有にして無間に入る」
という水の精神なのです。これを、ぜひ忘れてもらいたくないのです。

●水は有用になるほど謙虚に低い方へ流れる

まず老荘思想の基本は、水なのです。水とは、われわれ人間にとっては非常に重要で、
人間もおおかた水でできているというぐらいに重要なものですが、水は誇らない。「私は
大変な存在なんだ」とも言わないし、とてもへりくだって、いつも腰低くわれわれに対し
ているのが水なのです。しかし、一旦緩急、水がないとなったら、これは命に関わります。
命に関わるような大変なものでも、いつもへりくだっています。言ってみれば、じめじめ
したような低いところ、低いところへ流れていくのが、水の持っている謙虚な姿勢だと
いうことです。そうやって有用になればなるほど、世の中に認められれば認められるほど、
水の精神をもって低いところ、低いところへ流れていくのだ、ということを老子は言っ
ているのです。老子をぜひ参考にさせていただきたいと思います。

老荘思想に学ぶ (3) 「過度」を戒める「道」の思想

～講義録～

●宇宙の根源を意味する「道」

そもそも「老荘思想とは何なのか」ということですが、まず老子という人はどのような人かという、あまり明確に「こういう人です」ということはどこを探しても出てこないのですが、唯一、司馬遷の『史記』に出てきます。その有名なエピソードで、孔子が老子に会いに行ったという話があります。会いに行った孔子が、そこで老子に欠点を追及されて、「こういうところは直した方が良い」と、こっぴどく言われて帰ってくるのです。

これは象徴的に書いてあると思うのですが、孔子の儒家の思想に対し、老子の思想を道家といいます。なぜ道家かという、「道」というものを表現しているからです。道とは宇宙の根源です。その宇宙の根源のありようを、自己のありようとして生きていくのが重要だと説いているものです。この「道」を中国語でいうと、「タオ」、あるいは「ダオ」と発音します。ですから「タオイズム」は、そこからきたものです。

●ダイナミックな老荘思想

中国古典の二大思想は、儒家の思想と道家の思想の二つなのです。象徴的に「儒家の思想」といえば、孔子その人です。その孔子をぼろくそに指摘したのが、老子という老人なのです。

そして、孔子が帰ってきて、弟子が「老子はどういう人でしたか？」と聞くと、ここがまた象徴的に「あたかも龍のような人間だった」と言うのです。

老荘思想という、一見、癒しの学のように受け取られていますが、実はベースには、この「龍のような」計り知れない広がりや強さ、何か今までの既成概念を粉々にされるようなものがあり、その点では非常にダイナミックなものなのです。宇宙の根源を「道」というぐらいですから、読みようによっては宇宙論なのです。そういうものから、本当に親しい仲の親子や夫婦といった人間関係、特に上司と部下などのあり方を説いているのです。

●過度を戒めた老子

基本的には、現在のこの状況、あるいは政治や社会のあり方を良しとしないというものです。その良しとしない最大のポイントは、「やらないからあなたは不幸になっている」という論法が強すぎる、と言っているのです。本当にそうなんですか？ と。つまり「やり過ぎるということはないですか？」と言っているのです。「やり過ぎるから、うまくいかないことの方が多いのではないですか？」と言って、過度、要するにやり過ぎるということの戒めを、非常に主張しているものなのです。

その象徴的な言葉としてまず挙げたいのは、「得難きの貨を貴ばざれば、民をして盗（とう、＝「盗み」のこと）を爲さざらしむ」。つまり意欲を湧きたたせる、掻きたてさせるために、「得難きの貨」を示すということです。「給料を今度このぐらいあげるよ」と言うと、「良いですね。じゃあやります」となるわけですが、それは実力があって初めてかなえられることです。本来は実力をつけるという方へ情熱を向かなければいけないのに、「得る」ということばかりになってしまう。そうすると、どうなるかと言えば、結局は職責が果たされなかったり、目標が達成できないということになり、人のものを奪ってこなければいけなくなるというようなことになってしまうのです。ですから、この論理を強くすればするほど、社会では盗っ人ばかりになってくる、ということを老子は言っているのです。

●実力をつけずに欲望を煽れば、心が乱れる

さらに「欲す可きを見（しめ）さざれば、民の心をして亂（みだ）れざらしむ」。「欲す可きを見さざれば」、これは反対に言っているわけですが、「これが欲しいだろう」と見せてみる。「これ」とは、家や車など身分不相応な暮らしのことです。何かそういう豪勢な暮らしをどんどん煽りたてるというのが、戦後の日本の状況です。夢や希望を持たせることは非常に良いと思うのですが、それを得られないと無能であるかのように言ってしまうというところが、困ったものなのです。本来は先ほどから言っているように、実力をまずしっかりつけ、実力を上げていくことが、実は良い暮らしの最大の基本なのだ、という点がしっかりなければいけないのです。しかし、心を煽りたてるようなことばかりになってしまうわけですね。

「民の心をして亂れざらしむ」。ですから逆に言うと、そうした心を煽りたてるようなものばかりに囲まれていくと、特に若い人の心などは「亂れ」てしまうということです。犯罪の一つのスタートも、そういう社会的風潮にある、ということですね。過度を和らげていくべきなのです。「もっともっと」ということになればなるほど、今日は一つで良かったものが、明日は二つでないと満足できなくなり、明後日は三つ、というようになっていくのが、欲望の拡大の法則です。どんどん欲望が募るようになってしまい、身の破滅に向かっていくということです。

●名前や肩書きに踊らされず、実質を重視する

そこで、老子がもっと実質を説いているのです。腹を満たすとか実力を上げるといった実質です。質朴、もっと実質的なものを重視するという風潮が重要だということです。なにか脚光を浴びて名声をひけらかすようなこと、「名の名とすべきは常名（じょうみょう）にあらず」という言葉が最初に出てくるのですが、名前、名声、有名を得れば得るほど、それに踊らされ、使われて人生を送るような羽目になってしまう、と戒めているのです。名前を肩書きと見れば、「肩書きが泣く」ということです。そのくらいの実力の持ち主や、人間性あるいは人格の持ち主はたくさんいる。世の中ではやはり低い立場の人よりも、高い立場の肩書きを持った人の方が尊重されてしまう傾向があるけれど、そもそも名前などは、A、B、C、1番、2番、3番といった符丁のようなものであり、そのようなものに踊らされてしまって、人生を間違っただけは困る、ということをお説きしているのです。

●自慢した瞬間に、功績は逃げてしまう

さらにその過度を戒める最たるものとして、「誇る」ということがあります。誇ることはそもそも良いことなのですが、自分のやったことを誇らしげに自慢してしまうと、自慢した瞬間にその功績は逃げていってしまう、と教えています。したがって、道のありようを自己のありようとする人間は、「誇らず」なのです。「まあ、通常のことをやっただけですよ」というようなことを言って一言も誇らないから、逆に周りが気を遣って、「いや、あなた、もっと自慢したらどうですか」というようなことになる。つまり、端からその評判が高まっていくのが本当なのではないだろうか、ということです。自分で誇るのはいくらも骨頂で、自分のせっかくやったことを台無しにしている、ということですね。業績を誇ったり、自分の持っている学歴や家柄などを誇るということがありますが、両方良くないと

田口佳史

言っているのです。

●「和光同塵」の精神を尊ぶ

それでは、どういう精神で生きるのが良いのかというと、「其の光を和げ、其の塵に同ず」と言っています。これは有名な「和光同塵」という言葉です。つまり、才気煥発とは、その人からぱっと光が出てくるようなものなのです。そういう才気を剃刀などと言われて得意気になってしまうのは、一時は良いかもしれないけれど、ずっとそういうことをやっていると皆から嫌がられてしまう。「なんだか鼻持ちならないやつだねえ」、というようなことになってしまう、ということです。光を自分から和らげて、平々凡々な人間にしておいて、いざ、ここだ、というときに、その才気がぱっと溢れ出るようなものが良いのです。

常に自分がいるのは、「塵に同ず」。要するに、一般の通俗的な裏長屋で気楽に暮らしていても、何か一旦緩急あったときには、ぱっとリーダーシップを引くというようなもので、この「和光同塵」を老子は説いているのです。

●やり過ぎは人間を不自由にする

さらに良い言葉があります。それは「持して之を盈（みた）すは其の已（や）むに如かず」というものです。どういうことかということ「持して之を盈す」は、例えばここにコップがあって、口丈いっぱい水を注がれて、「さあ、こっちに来い」と10メートル先ぐらいから言われても、もう誰も、どんなに偉い人でも動くわけにはいかない。コップいっぱいの口丈の水で、人間は不自由になってしまうということなのです。

つまり過度、やり過ぎとは、人間を不自由にしてしまうということです。もう嫌になるほど食べて満腹で、「さあ走れ」と言われても無理ですね。そのように、やり過ぎや食べ過ぎ、思い過ぎなど、何でも「過ぎる」ということは、徹底的に人間を不自由にしてしまう。何でも七分が一番良い、ということです。 「軽い」という状態です。「胃が軽い」とか「頭が軽い」といったことが、非常に良いのです。

●過度にせず、ほどほどであとは道に任せる

さらに言ってみれば、「揃（きた）へて之を鋭くすれば長く保つべからず」です。これは刀鍛冶のところへ行って、日本刀をじっと見ていると分かりますが、とってんかんとってんかんとやっていた最後に、かんっと入れて、「はい終わり」となるわけですね。その最後にもう一回、かんっとやった瞬間に、今まで真っ直ぐだった刀がぐにゃと曲がってしまふ。最後の最後に余計なものを一つ打った瞬間に、刀が刀でなくなってしまうということがあるのです。鋭くし過ぎる。「何しろ鋭くすりゃいいんだろう」ということで打ち過ぎては駄目だ。鍛えて鋭くし過ぎは駄目だ、ということです。

人間もある一つの感覚を徹底的に鋭くすればするほど、それ以外のところが悲鳴をあげるような状態になって、バランスが悪くなってきます。やり過ぎるとバランスが非常に悪いものになってしまう。そのように、過度とは非常に怖いものだ、と言っているのです。ですから、あなたの人柄がなかなか認められなかったり、自分の仕事がうまくいかないときには、もっとPRしたり、誇ったりするのではなく、「そういうことをやり過ぎているのではないか」と思って程良いところで止めて、宇宙の根源である道に「どうかあとはよろしくお願いします」と任せることが重要なのです。そういうことが重要だと、老子は言っています。

老荘思想に学ぶ（4）「生命論」をビジネスシーンに活かす

～講義録～

●「体道第一」で、言葉の限界を知る

『老子』を開くと、「体道第一」という章から始まります。「体道」とは、「体で道を体得すること」です。もうすでに申し上げましたが、老荘思想では宇宙の根源を「道」と呼びます。天地を創り、万物を創ったものが「道」と言われている。言い換えれば「生みの母」です。生みの母の言い付けをよく守り、その人の言う「こうしなさいよ、こうやって生きるんだよ」という教えを守っていくのが一番いい生き方ではないかと説いているのです。

では、その「道」とは、どういうものなのか。『老子』の一番最初を開いて、どんな章句から始まるかを見てみましょう。

「道の道とす可(べ)きは常道に非ず」という言葉から始まります。これは何を言っているのかというと、いま私が口に出したように「『道というのは...』と言った瞬間に、「それは道ではない」と言っているわけです。すごいですね。つまり簡単に言うと「言葉には限界がある」ということなのです。

「道」という言葉が出た瞬間に、私が感じる道と、皆さん一人一人が感じる道はもう違っている。だから、本当の「普遍的道（エターナル・タオ）」とは全然違うものなのだと知っているのです。そのぐらい言葉は頼りないものである。言葉は理屈を生みますので、理屈一点張りがいかに頼りないかということも示しているわけです。

●言葉で説明するより、現場へ行くのが勉強になる

では、どうしたらいいのか。一つの例として、生まれながら目の不自由な方がいると仮定してお話ししてみましょう。そうすると例えば、今そこにある水のボトルを言葉で説明しようとしても、言葉には限界があるので、その人の頭にそれ自体の像がありありと浮かぶことはないのです。では、どうすればいいのかといえば、触っていただくのが一番いい。触ることが「体得する」ということなのです。

道について書かれた『老子』の「道德経」は81章にわたりますが、それらを理屈ではなく感覚で読んでほしいと、冒頭で述べているわけです。その象徴が「道は体得するものだ」と示す「体道第一」の言葉です。

何事も言葉や理屈に頼ろうという現代人の最大の弱点を、老子は予見しているようです。それよりは体験をさせた方がいい。もっと言えば、現場に連れて行った方がいいということです。現場には匂いがあるし、五感が働く。全てのことは五感を用いて体得させる方がいいということです。

教育などにしても、学校の中でやっているようなものだけでは済まないのだから、いろいろな現場へ連れて行く。例えば生産工場の現場へ連れていくとか、何か凄まじい事故のあった現場へ連れていくことです。そういう生々しい現場の方が、生徒にとってはよほど勉強になる。ところが、「教育」というと、学校の中で教科を教えるのが常識になっている。それが果たしてどこまで正しいのかを、もう一度考えてくれと老子は言っているのです。

●常識外れの真実に触れると「生命論」が身にしみる

常識外れのものの方が、実は筋が通っている場合はたくさんある。老子はそう説くわけですので、「常識を疑う」ことを表した章句を、いくつかご紹介したいと思います。

まず「曲なれば則(すなわ)ち全く、枉(おう)なれば則ち直(なお)し」という言葉があります。

これは、何か。「曲」は曲がっていることで、何がかとすると「枝ぶり」です。幹も枝もくにゃくにゃ曲がっている木というのは、どうでしょう。使いにくくてしょうがない。材木としては失格ですから、切られることがない。逆にスーッと伸びたものは使いやすいので、真っ先に切られる。つまり、長命という観点から見れば、曲がったもの、使いづらいものの方がよほど価値があるのだと言っているわけです。

老子が説いている中で、最大のポイントは生命論です。つまり人間が真っ先に考えなければいけないのは、「いかに命を大切に生きているのか」だということです。この世に生きていることを、もっと重視する必要があるということです。

●曲がると悪いか、古くなると悪いかを自分に問うてみる

私は自分の体験もあるので「生きているだけで百点」と言っていますが、老子には「足るを知る者は富む」という有名な言葉もあります。「生きているということでは十分ではないか。他にあなたは何を望もうというのか」と考えれば、変な欲もなくなってくるということです。

この章句、「曲なれば則ち全く」でも、やはり「寿命通りに生きる」ことが述べられています。さらに、「枉なれば則ち直し」と続く。例えば尺取虫などは、曲がって曲がって進んでいくわけですが、実はそういうものの方が真っすぐ行ける。少々曲がっているようなものの方が、人生においても真っすぐな道を歩めるのだということを示しています。

さらに、「弊なれば則ち新なり」という言葉に続きます。「弊」は弊害の弊で「滅ぶ」ということですから、古くなることです。古くなるのはよくないことのように思われますが、これも古くなるから初めて「新しくしよう」という気持ちになれる。新しいものを生む源泉として、物事が古びることは歓迎すべきなのだという道理を伝えています。古くなったり、古びたりすることはよくないと言われるが、そうではないと言っているのです。

老荘思想の「道」を頼りにして生きているものは皆、通俗的な意味での「基準」とは違う生き方をしています。

●才子短命をいたむ老子の思い

ここで少々告白してしまうと、私も25歳の時に大けがをして、死ぬか生きるかの最中に『老子』を差し入れていただきました。そして助けられて以来50年間、『老子』を唯一の座右の書として、ほとんど老荘思想だけで生きてきたと言ってもいいと思います。

自分が悔い改めたのは、全て老子が説いていることばかりでした。あまりにも通俗的な常識にとらわれている、そんな自分を変えていく必要があるのではないかと、本当に重要なものは命ではないか、ということだったのです。

老荘思想の『荘子』などによく出てくるエピソードがあります。とても出来のいい、才

田口佳史

気煥発な人間がいて、なんでもどんどんこなしてしまう。「立派な人だ」「腕もあり、頭脳明晰で、すごい人だ」というので、皆がどんどん仕事を頼む。仕事がどんどんいっぱいになってくるので、とうとう健康を害して若死にしてしまった、というのです。これは老荘思想からいうと、「なんともったいない、惜しいことだ」というわけです。

本当はそういう人にこそ、長生きをしてほしいという老子の思いが、とてもよく出ている話です。自分の能力は少しためて、あまり発揮しないようにして、ゆっくりと先へ行くことが重要だということです。ところが今の世の中を見ていると、なにしろ急いでいる人が多すぎます。それらは全部、命に打撃を与えている生き方ではないのか、ということが言われています。

●敵をつくりながら猛進するか、味方をつくって迂回するか

それに関して、老子のよい言葉をもう一つ、申し上げます。

「善く戦に勝つ者は争はず」というものです。どこかで聞かれた覚えがあるかもしれませんが、孫子の兵法では「戦わずして勝つ」と言います。東洋の戦争論として、非常に重要なものです。東洋の戦争論は「戦わない」ということですが、その大元はこの老子の言葉ではないかと思うのです。

現在のビジネスシーンに照らし合わせてこれを読むと、どういうことになるでしょうか。私は今までに1万名余りのビジネスパーソンを指導してきましたが、出来のいい人ほど、出世競争の最短距離を猛烈な勢いで爆進されている。それなりのポジションに行き着くまで、徹底的に猪突猛進されるわけです。

猪突猛進すると、いろいろな人と衝突をしますし、そこから軋轢も生まれます。よく考えてみると、敵をつくりながら目指すポジションへ行こうとしているわけです。ですから、最短距離でたどり着いたとしても、そのプロセスでは徹底的に敵をつくってきている。気づいて下を見ても、周り中を敵に囲まれているような現状になっている人が多いのです。あるポジションまで行ったのはいいけれど、そうなると、そこからが大変です。

逆のパターンを考えてみると分かります。人との付き合いを丁寧に大切に、ゆっくり時間をかけて進んでいく。つまり、少々時間はかかるかもしれないけれど、味方をつくりながら目指すポジションまで行くわけです。こちらは到達した後が楽になります。

●素朴を旨に、欲の少ない人を目指す

何らかのポジションにたどり着いても、その後がやりにくくなるプロセスを歩む人が非常に多い。これは、ぜひ悔い改めていただくことが重要です。そういう人のための、とてもよい言葉があります。

「素(そ)を見(あら)はし朴(ぼく)を抱き、私(わたくし)を少くし欲を寡(すくな)くせよ」
という言葉です。老荘思想では「見素抱朴」と言います。

「素」とは何か。見栄や外聞、気取った見てくれの自分ではなく、本当の自分の真心であり、人間としての良いところ、人間性の善良な部分を「素」と言います。「あらはし」ですから、自分の素地を表すということです。

そして、「朴を抱」く。「朴」は切り立ての樹木で、何もまだ美しくしていない「荒木」のことです。素朴や朴訥という言葉で表されるようなところを重視する、といえるでしょう。

それで、「私を少くし欲を寡く」する。「少私寡欲」と言いますが、「少私」は少ない私で、自分が持つ「私の欲」を少なくする。「寡欲」の方もやはり少ない欲です。

「見素抱朴、少私寡欲」は、自分を戒める言葉として非常に有用です。私も、こういうものに何度救われたかしのれないのです。

老荘思想に学ぶ (5) 「陰陽論」からリーダーシップへ

～講義録～

●比べる「相対論」から、見極める「陰陽論」へ

老荘思想の説くところをお話しするのに、非常に重要な部分が「陰陽論」です。全てを陰陽で見るということですが、冒頭の章から二つ目に、次のくだりがございます。

「天下皆(てんかみな)美の美たるを知る、斯(こ)れ悪(あく)のみ」

「これは美しい」と人が言うときには、何かそれより「醜い」ものを基準として言っているのではないか。もっと美しいものが出てきたらどうするのかを問うているのです。つまり、比較対象のある「相対論」として見るのはよくない。「多い・少ない」「難しい・易しい」など、全て物事を相対論で見るときには、そのものの本質を見失っている、と言っているわけです。

では、「誰かに比べてこの人は…」という見方をやめたらどう見るのか。人間にはその人の個別の良さがたくさんあるのだから、その人なりの良さを見る。松林などに行かれ、松を一本一本丁寧にご覧になると、一つとして同じ枝ぶりはありません。それと同様に、人間は地球上に65億人いると言われていますが、何もかも全て同じという人はいません。

万物を生んだのが「道」だとすると、道はそこまで「個性」を重視しているというわけです。相対論は、個性を木っ端微塵に台無しにします。個性をよく見ていくことが重要であるというのが陰陽論です。

●人間の美しさと汚さをともに受け入れる

「美の美たるを知る」の前にある文章は、どうでしょうか。

「常無(じょうむ)は以て其の妙を觀(み)んと欲し、常有は以て其の微を觀んと欲す」

無欲になると「妙(みょう)」が見えてくる。この妙とは、微妙とか「妙なる調べ」の妙(たえ)であり、無欲のときには人間の非常に崇高なところが見えるという。

ところが有欲、すなわち欲を持った瞬間に、「徼(きょう)」が見える。徼とは何かというと、直接的にはカオス(混沌)という意味で、欲望の渦巻く部分を指しています。

人間というものは、妙だけでは成り立たないし、徼だけでも成り立たない。妙があれば必ず徼がある。つまり人間は、非常に美しい善良な部分も持っているけれど、ものすごく欲深く醜いところもある。そういうことを承知して人間と付き合うことが重要なのだということです。

よく「あんなにいい人だと思っていたのに、どうして？」といった話を聞きますが、25歳の時から陰陽論で生きている私は、そのような人間の見方は全くしていません。私自身もそうであるように、人間には美しいところもあれば、当然に汚らしい部分もある。それを承知しているからこそ、なるべくきれいなところを増やそう、表そうとするのです。

●人間の心を「粗雑に」扱う方法とは

「美しいこと一点張り」という人もいなければ、こともないのです。それを承知して生きていくのが、ダイバーシティを生きる非常に重要なポイントです。誰にも皆、ずる賢いところもあれば、善良な部分もあるという見方をすることは、陰陽論で生きていく上でのまず最初の知恵だと言ってもいいと思います。それをもっと強調していくとどうなるか。老子は、一番丁寧に扱わなければいけないのは「人間の心」とであると説いています。

では、一番粗雑な扱いはどういうものかということ、先ほども出てきました「得難きの貨は人の行(おこない)をして妨げしむ」です。

「得難きの貨」とは、身分不相応の獲物か何かをぶら下げて、「これが欲しかったら、こういうことやってごらん」というような、人間の尊厳を非常にないがしろにするような行為を指しますが、それではいけないのです。

ビジネスの現場には「インセンティブ・ルール」というものがあり、そうしたことを吹聴する向きもあります。ある程度はいいでしょうが、過度にそればかりになると、

田口佳史

まさに「得難きの貨は人の行をして妨げしむ」となり、うまくいかない結果になってしまう。ドッグレースの犬のようなもので、疲れ切ってしまうのです。

つまり、命を一つ、傷付けてしまうことになるから、老荘思想から言うと、よくない。その人が本当に心の底から意欲的になるところを徹底的に開発することが、非常に重要なのではないかということです。

●狩りのやむにやまれぬ恐ろしさとは

一見、その人が心の底からやる気になっているような状態でも、よく見ると危険な状態がたくさんあると、老荘思想は言っています。

その一つに、「馳騁田獵(ちていでんりょう)は人の心をして發狂(はつきょう)せしむ」という、恐ろしい言葉があります。

「馳騁田獵」は、狩りのことです。狩りは面白いもので、一旦やるとやみつきになる。もっとやろう、もっとやろう、となってくる。人間の特性には、つかめない何かこそつかみたいという部分があり、そこに訴えるからです。

それをことさらに奮い立たせ、全力を発揮させる方向に持っていくと、最終的には發狂させてしまうことになるという。何が狂ってしまうのかというと、人間的な尺度とか、そういうものでしょう。老子は、そのような警告をしているのです。

狩りに限らず、追って捕らえることに醍醐味を持つものには、終わりがなくなってしまう。結局は、心が狂って終わるという恐ろしいものになってしまう。人間の心を大切に扱うべきであるとする老荘思想からすれば、あってはならないことです。

そのような極端なものよりも、むしろ朴訥に「足るを知る者は富む」方向に心の満足を求め、感謝の心で生きていく方が、人生はよほど豊かになるということを言っているわけです。

●天地にも聖人にも「仁がない」とは？

人間関係のあり方に対しては、たくさん言葉があります。その中で特徴的なものをまず

田口佳史

一つ挙げると言えば、次の言葉です。

「天地不仁(てんちふじん)、萬物を以て芻狗(すうく)と爲(な)す。聖人不仁、百姓(ひゃくせい)を以て芻狗と爲す」

「天地不仁」とは、天地には仁がない。仁とは何かといえば愛情で、天地には愛情がない。また、ここでは老荘思想で生きている、つまり道のありようを自己のありようとする聖人も「仁がない」と言われています。

「仁がない」とはどういうことなのかを示すのが、「百姓を以て芻狗と爲す」と「萬物を以て芻狗と爲す」です。「芻狗」とは祭礼用のわら犬ですから、日本で言えばお正月のお飾りのようなものです。お正月の間、皆が大切にしておくお飾りも、その時期を過ぎて役割を終えれば、また神社へ返します。「芻狗」、すなわち祭礼用のお飾りは役割である。そのもの自体が愛すべきものであったり、自分にとって貴重なものであるわけではない。ただ、役割を果たしているだけだ、というのです。

●私的な感情で物事を判断する恐ろしさ

上司と部下の関係においても、変に仁を持ってしまうと「Aくんは可愛いけど、Bくんは可愛くない」といったえこひいきや派閥の論理のようなものが生まれてしまう。特別な感情としてひいきをされても厄介なだけだ。部下という役割を皆が果たしてくれているのであって、好き嫌いで自分のところに来ているのではない。そのように思ってくれた方が、部下としてはありがたいわけです。

「特別の愛情」といっても、プラスに働く場合もマイナスになる場合もあり得るわけです。だから、天地にもそういうものはない。例えば天地から「皆さんは可愛いが、田口は可愛くない」と言われてしまえば、私はその瞬間に生きていられなくなってしまいうわけですから、そういうものはない方がむしろいい。人間も、天から見れば、ある役割を果たすためにこの世にいる。同様に、上司・部下の関係もそうである。私的な論理や感情でこの世の中を見ていくことは危険極まりないというのです。

したがって「其の私無きを以てに非ずや。故に能く其の私を成す」ということになる。私的な感情を持って、自分中心に見ていくことは非常に危険なものです。「私的」を別の言葉で言えば、利己主義や自分中心、自分勝手ということになる。それは多くの人が一番嫌う人間であるし、さらに言えば孤立してしまうことにもつながります。

ですから、自分すなわち私を確立するにはただ一つ、自分をなくすこと、無私・無欲が非常に重要だと言っているのです。ぜひ、こういうところもよく知っておいていただきたいです。

●「無用の用」の必要性とは

もう一つ挙げておくと、「無用の用」ということも非常に重要です。例えば、土をこねて器をつくるとき、真ん中に空間があります。それだから器や井になったりするので。この空間を「もったいないじゃないか、無駄じゃないか」と言うと、それは器にならないわけです。

「埴(ち)を埴(せん)して以て器(き)を爲(つく)る。其の無に當(あた)りて器の用有り」

無用な部分があるから器になるのではないか、と言っています。また、窓をうがつ、すなわち窓を開いて部屋をつくる。その窓は無駄ではないかとか、部屋の中の空間をも無駄ではないかと言ってぎゅうぎゅう詰めにする愚かさを述べています。

さらにこれを読んでいくと、休みも無駄だからと言って、一生涯、来る日も来る日も朝から夜まで徹底的にスケジュールをしっかりと詰め込む。特に人気商売ではそうなりがちで、私の周辺にもそれで体を壊した人がたくさんいます。スケジュールがいっぱいなことを誇りにして、それを続けていたところ、ある日突然体が動かなくなるようなことは、非常に多い。やはり人間にとっては、「無用の用」という何でもないときに重要なのだということです。

人間に一番エネルギーが入ってくるのはどういうときかということ、無為無欲で何も持っていないとき、もっと言えば忘我、我を忘れているときが一番いいのです。ですから、エネルギーが入ってくるのに日なたぼっこなどは一番いいと、私は言っています。そういう時間を無駄だとして切り捨てていくと、常にエネルギーが噴射していくばかりで、入ることがありません。

組織であれ社会であれ、一見無駄なことを重視することこそが、老荘思想の非常に重要なものです。「あそこの空間、何だろう。無駄じゃない？」というような空間があって初めて街の潤いができる。私の子どもの頃はそういう空間だらけだったのですが、最近は皆きれいになってしまい、ちゃんと用途の明確な街並みになっていて、少しも面白くない、

田口佳史

ということになります。このような「無用の用」についても、老荘思想は説いています。

●リーダーは慎重に、用心深くあれ

最後に、老子はリーダーシップ論も説いています。老子が説くリーダーとはどういう人でしょうか。

「與(よ)として冬川を渉るが若(ごと)く」「猶(いう)として四隣を畏るるが若く」

「猶予」という字が頭についています。「與」については「冬川を渉る」ように。つまり、氷の張った冬の川を渡るときには、こちら側に体重を残したままでトントンたいてみて、重心を移していく。そのように慎重に、ということを行っているのです。「猶」の方は用心深く。「四隣」ですから、周りを「畏るるが若く」ということです。

最近のリーダーに目立つ欠点は、この心がけが薄いことです。発言でも行動でも非常に大胆不敵になってしまっている。「そんなことを言わなくていいんじゃないんですか？」ということをしてしまったがために、一生を棒に振ってしまった人もいます。「そういうことはあまりされない方がいいですよ」ということをしたがために、一生浮かばれなくなったリーダーもいます。だから、今の日本は人材不足になってしまい、非常にもったいないと思うのです。

今のこの世を、「冬川を渉るが若く」で、慎重に生きるんだよ、「猶として四隣を畏るるが若く」で、周りを畏れて用心深く暮らすんだよ、ということ、小さいときから徹底的に教えてあげることが重要です。俗に「脇が甘い」と称されるリーダーが、今は多すぎるわけで、これはもったいない。人材がたくさんいればいいのですが、少ないのですからもったいない。ぜひリーダーはこの言葉を胸に、リーダーシップをふるっていただきたいと思います。